



No.1 土地利用型農業法人の早期経営安定

- 活動期間 令和3年度～令和4年度
- 対象者名 農事組合法人おさとファーム（役員5人）
- 課題の背景
 - ・農事組合法人おさとファームは、令和元年9月に組合員15人で設立し、経営面積は水稲5.5ha、大豆11.9ha、小麦19haである（R3年産）。大豆はR2年に初めて作付け。
 - ・法人の経営エリアでは鹿飼沼地区農地整備事業（H23～R6, 383ha）を実施中。ほ場整備を契機に委託を希望する農家も増加しており、法人への期待が高まっている。
 - ・5人の理事の平均年齢は69歳で、いずれも定年後に農業専業となった。10年後には後継者に引き継ぐことができるよう、法人としての基盤を築きたいと考えている。
 - ・地域の農地を守る組織としての活動はできているが、計画的な法人経営やコスト管理、栽培技術の習得等、法人として事業継続していくための利益を生み出す体質作りが必要である。

活動内容及び成果の概要

定性的目標	活動事項	活動内容及び成果
<ul style="list-style-type: none">■ 経営計画策定に向けた検討が行われ、経営計画が策定される。 	<ul style="list-style-type: none">◆ 法人経営管理支援	<ul style="list-style-type: none">■ 複式簿記や決算書に関する法人会計勉強会を全3回行い、決算書から課題を抽出し、課題解決のための予算と目標を設定することについて理解を進めた。■ 実績を基に月別資金繰り表を作成し、役員会で検討したところ、全ての役員が資金の動きを理解するようになり、作付計画の策定においても、経営の観点から検討するようになった。■ 次期収支予算案の作成を支援し、総会で提示する事とした。
<ul style="list-style-type: none">■ 大豆栽培の適切な栽培管理が実施され、収量が増加する。	<ul style="list-style-type: none">◆ 転作作物の生産安定支援	<ul style="list-style-type: none">■ 大豆は小麦収穫作業との競合により、適期播種（6月上旬）と播種遅れ（7月下旬）のほ場があるため、生育調査による生育の数値化を行い、適期作業指導と合わせて、栽培基本技術の習得と来年以降の生産計画策定を支援した。■ 現況に応じた農地利用計画が作成されるようになった。 

定量的数値目標の達成状況

設定した目標：策定計画数 R2年 0 → R3年 1 → R4年 2
(単年度計画) (単年度計画, 中期計画)

R3年度における達成状況：策定計画数 1 (単年度計画)

No.2 地域の特色を生かした「吟のいろは」の産地化の実現

- 活動期間 令和2年度～令和3年度
- 対象者名 松山町酒米研究会（吟のいろは栽培者 10人）
- 課題の背景
 - ・「吟のいろは」古川農業試験場で育成された品種で、大粒で心白発現率が高い特性を持つ酒造好適米であり、柔らかくふくよかな味の酒ができると実需者からの期待も大きい。
 - ・松山町酒米研究会では、令和2年度は8名で6.7haを栽培し、「吟のいろは」に対して大きな期待を寄せている。しかし、まだ新しい品種であることから、良質な原料提供のためには早期に栽培管理技術を習得する必要がある。

活動内容及び成果の概要

定性的目標	活動事項	活動内容及び成果
<ul style="list-style-type: none">■ 「吟のいろは」の栽培技術を習得し、高品質な原料米を生産する。	<ul style="list-style-type: none">◆ 栽培管理技術確立支援	<ul style="list-style-type: none">■ 目標収量構成要素を再度説明、令和2年度と同じく4展示ほを設置し、育苗時から巡回指導を行った。■ 移植後は研究会員と一緒に生育調査を実施し、結果はフィードバックした。追肥時には、生育状況を説明した上で時期、量を設定することができた。これにより、情報を生産者で共有し、前向きに栽培に取り組むことができた。■ 目標生育量に近づいてきたが、m²当たり粒数まだ過剰傾向にあり、等級は目標に届かなかった。今までの調査結果を基に「栽培マニュアル」を作成予定。次年度以降の栽培改善に繋げる。 
<ul style="list-style-type: none">■ 産地として生産振興を図るため必要な種子を確保する。	<ul style="list-style-type: none">◆ 関係機関と連携した産地化支援	<ul style="list-style-type: none">■ 多くの関係者が情報共有し、打ち合わせ等を行いながら、産地化支援ができるよう取り組むことができた。■ 県酒造組合及び蔵元と意見交換を行い、「吟のいろは」に良好な感触を得た。一方で品質のばらつきに厳しい指摘もあり、平準化に向けて今後も活動を継続する。■ 適宜種子の在庫量や配布日程等の情報を確認、研究会事務局に提供することで、生産体制の円滑化を図ることができた。 

定量的数値目標の達成状況



設定した目標：農産物検査における「特上」「特等」割合
R元年 0% → R2年 10%(実績9.1%) → R3年 25%

R3年度における達成状況：「特上」「特等」割合 2.1%

No.3 持続的な生産へ向けたこねぎ栽培技術の向上

- 活動期間 令和2年度～令和3年度
- 対象者名 JA新みやぎ仙台小ねぎ部会（36人）
- 課題の背景
 - ・「仙台小ねぎ」は部会員36人で約17haを作付けしており、販売額は約3.5億円（R2）で地区の園芸品目の中で最大の販売額である。平均反収は2.7t/10a（R2）であり、3.4t/10aの達成を目指し支援している。
 - ・部会では品種試験や施肥改善など継続的に技術向上を図っており、成績優秀者の表彰を行うなど熱心に生産に取り組んでいる。優秀な熟練生産者の技術をモデル指標として「見える化」し、部会全体へ周知を図ることで、更なる技術向上と安定生産が期待できる。
 - ・近年、土壌病害である萎凋病が収量低下の要因となっており、より効果的な対策が求められている（475t(H28)→460t(H30)→447t(R2)）。
 - ・昨年の活動の中で、土壌物理性の改善が必要なことが分かり、土作りの取組を実施している。

活動内容及び成果の概要

定性的目標	活動事項	活動内容及び成果
<ul style="list-style-type: none"> ■ 熟練生産者の水管理やハウス内環境のデータ測定・解析により、栽培管理技術が見える化され効率的に高品質・安定生産が出来るようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 栽培技術の見える化による安定生産技術向上 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「見える化」の取組では、新規生産者1名で昨年データを参考とした管理を行い生育収量は良好であった。あわせて土壌水分や気温、湿度等の環境データを測定した。また、熟練生産者1名のデータ測定を継続し昨年調査を補完するデータが得られた。 ■ 若手生産者主体の研修会において上記調査に基づき栽培管理を可視化・数値化して示し技術の要点について理解が進んだ。 
<ul style="list-style-type: none"> ■ 病害虫防除及び土壌管理の基礎技術向上がなされ、こねぎの反収が向上する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 病害虫・土壌環境改善対策等による基礎技術向上支援 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 重点支援対象を選定し、7名のほ場で土壌硬度等の物理性調査を実施し課題を明確化した。深耕や廃菌床堆肥の施用等の土壌改良に繋がり収量が向上した。 ■ 灌水量と土壌物理性のセルフチェックマニュアルで部会員の意識向上が図られた。 ■ 萎凋病対策として「畝立後太陽熱土壌消毒」の実証ほで病害抑制を確認した。現地検討会等で理解を深め複数の部会員が実施した。 ■ 主力品種の種子の供給不足、単価安によるB品の出荷減等の要因で全体の販売数量は伸ばせなかったが、3.4t/10aを達成した生産者は6名から9名となった。 

定量的数値目標の達成状況

数値目標：販売数量 R1年 2.7 → R2年 3.2 → R3年 3.4 (t/10a) (実績 2.7)

R3年度における達成状況：販売数量 2.7t/10a